

国際生物多様性年の「生態系サービス」調査チーム

森林総合研究所とは、森林を総合的に研究する日本で唯一の研究機関です。つくばの本所を中心に、北海道から九州まで全国に研究拠点をもっています。この研究所が2年前から只見町で「生態系サービス」の調査をしています。この中間報告会が、1月23日、季の郷・湯ら里で行われました。只見での調査が、国内の先進的研究として注目されるかもしれません。只見の自然の奥深さを、プロジェクトチームの方々にじっくり解説していただきます。6回連載です。お楽しみに。

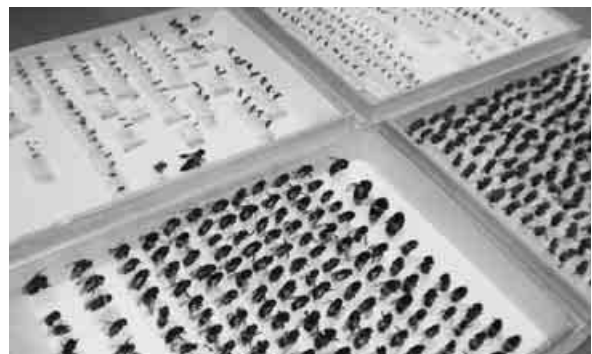
町にはいろいろな人たちがやっています。その時代を反映している訪問団もあります。「なぜ只見で始めたのか？」と、時々聞かれますが、今の時代背景がその答えになるかもしれません。これまで森林が関係する「環境問題」が話題となったことが何度かありました。1990年代の初めは国連の地球環境サミットがリオデジャネイロで開かれ、温暖化と森林の関係が関心を呼びました。生物多様性も話題になりましたが、自然保護団体を中心とする運動の効果もあり、種の絶滅速度を低下させることに関心が向き、生物と社会とのつながりについては意識が高まりました。こうした時期がしばらく続いて、日本では世論調査などを見る限り、関心が全体的に薄れかけてきたように見えたところに、2010年、名古屋で大きな国際会議が開かれることになりました。



箱庭的な景観は多様な生態系サービスの揺りかごです

生物多様性には、多くの種類によって支えられる一面と、希少な種によって持ちこたえられている一面があります。これまで後者の方に注目が集まり、前者は強い訴えかけに欠けていました。ところが最近、生物多様性が「生態系サービス」という言葉を紹介して語られる機会が増えてきました。生態系サービスは人々が生態系から得ている恩恵を意味し、生活の基盤となる生態系と恩恵を受ける人間の結びつきがきわめて適切に表わされています。言葉の持つ力は大きく、人々の関心をより高めるのは自然なことです。

我々が「生態系サービス」についてのプロジェクトの仕込みを始めたときから数年たちますが、関心の高まりや国際会議の開催などとなり、予算が下り、茨城県にある森林総合研究所といふところから調査団が来るようになったわけでは、どのようないくつかの調査を介して語られる機会が増えてきました。生態系サービスは大きく三つに分けられます。一つは、生態系サービスの基盤となる昆虫・植物・溪流魚などの調査隊で、種類や数のほかに花粉を運ぶ昆虫や天敵などに焦点を当てて調べています。二つめは、生態系サービスが人々に与える恩恵について、地元の人たちに発信機をつけて山の中に入ってもらおうほか、外から来た人たちが何を楽しんでいるかを調べています。三つめは、これまで売場で価値を計ってきたのに対し、アンケートや聞き取り調査を通して、売買されていないものも含めて生態系サービスの経済価値を計ろうとするチームです。一人が複数のチームに入って忙しく動いています。中国・アメリカ・イギリス・スイスからの訪問客もお連れしました。このような調査を通じて、どのような森林を維持すれば、より大きな恩恵が得られるのか、明らかにしたいというのが目標です。



只見町で人々の生活に貢献しているハナバチ(森林総合研究所、滝久智提供)

日本列島、北から南まで長いですが、山菜・きのこ・溪流魚といった山の幸、農業の営みを助ける森林性の昆虫、レクリエーション、希少な動植物など、さまざまな生態系サービスをもち、たらず豊かな生物相がこれほどまでに揃っているところはあまり多くはありません。雪が多い天然林が比較的広い面積で残っている、雪崩や火入れなどで小規模の攪乱を受けている、大規模伐採から逃れた古い林も比較的よく残っている、といった条件を揃えた地域は少ないからです。そのうえ、都会から近すぎず遠すぎず、乱獲から資源を守り、持続的に利用するための自衛手段を講じることができるといふことも重要です。また、我々の仕事も道半ばですが、少しでも只見町にとってお役に立てれば幸いです。